

ブラジル・パラナ州カストロランダにおける オランダ系移住地の創設と発展要因

丸山浩明

立教大学文学部

多民族国家のブラジルにおいて、各国移民の経済・社会・文化的発展とその要因を明らかにすることは、国民国家の成り立ちを解明する上で重要な研究課題である。ブラジルのオランダ人移民は、その数において圧倒的にマイノリティーであるが、とりわけ園芸農業、畜産業、乳業分野での貢献や活躍ぶりは際だって大きい。本研究は、ブラジルにおけるプロテスタント系の代表的なオランダ系移住地であるパラナ州カストロ市のカストロランダを事例に、移民の歴史や移住地の発展要因を実証的に解明することを目的とした。その結果、「二国間移民協定」に基づく国家的支援、先着同胞移民や宗教団体による移住環境の整備、福音改革派教会を中心に醸成されたオランダ系コミュニティの堅固な連帯意識や植民当初の族内婚による安定した移住地生活が、当該移住地の経済・社会・文化的発展に大きく寄与したことが明らかになった。

キーワード：ブラジル、オランダ人移民、カストロランダ、福音改革派教会、パラナ州

I はじめに

19世紀のブラジル帝政時代（1822～1889年）は、それまで約300年にわたり続いた奴隷制に基礎を置くポルトガルの植民地経営から決別し、国家としての独立と自由労働力に基づく新たな国づくりが模索された激動の時代であった。奴隷制廃止への圧力が強まる中、帝国政府は黒人奴隷の代替労働力としてヨーロッパ系移民の導入を企図し、19世紀前半にはスイス人やドイツ人（当時はドイツ連邦）などゲルマン系の移民が、19世紀後半には激減した彼らに代わりポルトガル人やイタリア人、スペイン人などラテン系の移民が大量に招致された（丸山，2013；丸山編，2013；伊藤ほか共著，2015；田村ほか共編，2017；丸山，2020a）。

1886～1975年の間にブラジルに渡った移民の数は、全体で約505万人に達する。このうち、国別ではポルトガル人が最も多く約156万人（31%）、次いでイタリア人の約150万人（30%）、

スペイン人の約71万人（14%）と続く（Ludwig, 1985）。これら南ヨーロッパの上位3国からの移民が、ブラジル移民全体の4分の3を占める。さらに約25万人の日本人（5%）、約20万人のドイツ人（4%）、約11万人のロシア人（2%）と続き、移民数が10万人を超えるのはこれら上位6カ国だけである。オランダ人移民は1万5104人（第二次世界大戦前が7984人、戦後が7120人）で、その数はブラジル移民全体のわずか0.3%（国別では19位）に過ぎない。

ポルトガル人やイタリア人を除き、外国人移民は総じてブラジルのマイノリティーである。例えば、移民数で上位の日本人でさえ、現在の日系人口は約190万人（2016年の日本国外務省データ）といわれ、当該年のブラジル人口のわずか0.9%に過ぎない。多民族国家ブラジルにおいて、オランダ系は移民数において圧倒的にマイノリティーである。しかし、それにもかかわらずオランダ系の経済・社会・文化的発展や、ブラジル社会への貢献度、移民としての認知度は極めて大きい